

巻頭言

社会環境の充実を

東京大学教授 加藤 勉

衣食住というよりは食衣住の順序でしょうか。敗戦直後から現在に至る迄に我々が人間らしい生活を取戻して来た順序のことです。言う迄もなく敗戦直後は我々はボロボロのアンペラ袋のような衣服を着て飢えと戦いました。食糧を生産するための肥料の製造、害虫を駆除するための農薬の製造が盛んとなり、小川から魚が居なくなりました。漸く飢餓の恐れを脱すると、次は少しはましな衣類を身につけようということになり、流行という言葉も復活して来ました。之等を支える技術は応用化学であり、この期間は応用化学全盛の時代でありました。然し之等は消費物資であり原料を国外に仰ぐことが多いため外貨を稼ぐ必要が生じます。之を担ったものが造船重機、自動車でした。勿論鉄鋼業の復興がその基盤をなしています。何しろ一時は世界中を相手にして戦っただけあって潜在的な實力は十分にあったものと思われまふ。航空機は駄目でした。ジェット機は戦後の産物だからです。一流の技術の開発には長い時間と資力が必要です。大学では冶金学、船舶工学、機械工学が日の当る学科となりました。然し重工業の隆盛は空気、河、海の汚染の問題をひき起こしました。

然し、之等は必ずしも消費物資ではなく無制限に増産さるべきものではありません。地球資源保護の立場から省エネルギーが重視され、技術の高度化にともない軽薄短小の時代が来ました。エレクトロニクスがその中心的役割を果たしています。

この間、住の問題はどのように推移したでしょうか。住の問題はどうしても一番最後になります。戦後しばらくは12坪の家を一族を上手に住まわせることが課題でした。住戸数が圧倒的に不足していたのです。戦後のベビーブームの世代が通学年令に達した頃、現在の大和ハウス工業が子供の為の勉強部屋として“ミゼットハウス”というパイプ小屋を売り出して、これが当たりました。何しろ12坪の家では子供は勉強しにくかったに違いありません。これが後にプレハブ住宅産業更に今日の工業化住宅産業に発展してゆくのですが、比較的最近迄は質的にはお粗末なものでした。産業の発展とともに工場建築も盛んになりましたが、屋根や壁はトタン板で夏は暑く、冬は寒く、空気は悪く、今考えると極めて劣悪な環境で皆さんよく頑張ったものと思います。昭和35年頃始めて欧米を訪問して当地の工場施設の清潔さに驚いたものであります。昭和40年頃からビル建築も盛んとなり、外観は立派なオフィスビルが建ち並ぶようになり、遂に最近の超高層建築ブームを迎えるに至りました。之等のビルの特徴は階高の低いことです。先日訪ねて来たイギリス人も何故こんなに天井が低いのかと不思議がっていました。現在の日本人は背は決して低くありません。要は建物が安く作れるからです。又一定の空間内に多くの人間をつめ込むことも出来ます。このように見えますと結局建物はその中で人間が働く為の、生産の為の容器としてしか考えられなかったのではないのでしょうか。住宅は飯をたべて寝ればよい。工場は暑かろうが寒かろうが作業が出来ればよい。オフィスビルは天井が低くて窮屈であろうが事務がとればよいといった具合で、人間も生産機械の一部として扱われてきたようであります。

ところが最近様子が変わって来ました。高級と迄はゆかなくても、その中で人間が楽しく生活できるような建物が求められるようになりました。何故か？これはよく判りません。単に政府が内需拡大を奨励したからだとは言いきれません。恐らく日本人も漸く敗戦後遺症から脱し、又もう戦争は再び無いだろうという本能的な期待から、半永久的な居住環境、社会基盤を作ろうとする考えが戻って来たものと思われまふ。空気や河川や海の汚染を取り除く仕事もこの中に含まれます。敗戦のショックはあまりにも大きく、脱却にはこれだけの時間がかかったものと考えられます。我々は兎小屋に住む働き蜂と言われるかと思うとたちまち一転して英国病にかかった怠け者と言われたりしましたが、日本人はバランス感覚と常識を備えた民族であり、立派な社会環境を築き得る實力をもっていると思います。社会環境の変化は人間の精神構造にも大きな影響を及ぼすものと期待しています。

年末から年始にかけてこの稿を書きました。従って前半は回顧的で後半は大法螺になりました。1989年、私は年男であり東京大学に留まる最後の年です。酔も格別であります。